

あとがき

本書は、筑波大学特別プロジェクト〈比較市民社会・国家・文化〉（プロジェクト長 辻中豊）に参加した人文研究者の論考に加え、この主題に密接に関係する研究者の論考を合わせて編集したものである。

このプロジェクトは、地球上の各領域・地域、各国の個別文化性を保持した上で、どのように市民社会と公共性に「偏在性」および「適応性」と「進化性」をもった新しい「普遍性」を付与し得るかという問いから出発し、社会科学と人文科学の協同によって「新しい地球的な価値」を提示することを目標として、二〇〇三年度から五年計画で始められた。

もちろんこのような当初の目標に十分かなう解答へと、この五年間で至ることができた訳ではない。むしろこの五年間は、市民社会というテーマが、右記のごとき大上段ぶった目標を抱かせるほどに巨大であるとともに、いかに捉えどころのないものであるかを、確認してきた期間であった。それは逆に言えば、個々の具体的視点からのせり上げを積み重ねなければ、市民社会は手触りのあるかたちとして把握することはできず、「個別文化性」を重んじた上で市民社会の「普遍性」を展望することなどできないということでもあった。さまざまな個別事象に視点を据え、根底的な基礎作業を試みる。おそらくそこから始めなければ、「新しい地球的な価値」を打ち立てることはできない。

したがって本特別プロジェクトの作業は、「社会科学と人文科学の協同」を旨とはしたが、テーマ的にも方法論的にも両者を強引に融合することはしなかった。そうではなく、研究者それぞれが個々の専門テーマから出発し、考察を提示しあいながら相補的に響き合うようなかたちの協同を目指してきた。

この相補的協同において、社会科学に軸足を置く研究者は、市民社会を構成する活動体の実態の調査から始め、市民社会の輪郭を実際のフィールドから立ち上がらせることに力を注いだ。それに対してわれわれ人文科学に軸足を置く研究者は、実態よりむしろ潜勢態へと視点を据え、歴史性と地域性という時間的・空間的な枠組の中で、市民性の概念あるいはその萌芽が、芸術、情報、思想、生活など個々の文化現象にどのように現れているかを、捉えようと試みたのである。

本書は、そのような試みの一つの到達点であって、特別プロジェクトの主催になる二つのシンポジウムをベースとしている。すなわち、二〇〇五年一〇月二九・三〇日に筑波大学東京キャンパスで行われた「ヘザワメキからのポイエシス——市民社会のノイズたち」と、同年一二月三日に東京日仏会館で行われた「*Écritures, pensées et communauté*」であって、これらシンポジウムでの議論を各人がさらに展開し、加えて新たな執筆者に原稿を依頼してできたのが、本書である。中には、フランス語の論文が二編含まれている。これらをあえて原語のまま掲載したのは、わが国のフランス研究者のヨーロッパへの発信力の高さを示すためでもあるが、当日の発表と議論の濃密さをそのまま伝えるためには、このほうが相応しいと判断したからである。

本書においてわれわれの目線が向かったのは、市民社会の実態ではなく、実態としてはいまだ見えてこない「へざわめき」であった。芸術や情報や思想や生活に潜勢する、記憶と夢想と想念のレベルから立ちのぼり、人々の集合体に市民社会というかたちをとらせようと／とらせまいとしているものの、「へざわめき」の諸相を捉えんとした作業の結果として、本書はある。

したがって本書は、プロジェクトのいささか大上段な目標とは多少とも異なったレベルへと、私たちを誘っている。しかしそれは、市民社会という概念そのものが孕んでいる矛盾と葛藤に、ミクロで具体的な視線を注いだ結果であると信ずる。本書が、市民社会の総体的把握を遠く見こした、人文研究としての基本的視点の設定に、いくらかでも関与できているようにと願うばかりである。大方のご教示とご叱正を賜れば幸いである。

本書の出版にあたっては、特別プロジェクトの辻中豊プロジェクト長、筑波大学出版会の谷川彰英先生、波多野澄雄先生、編集委員の先生方、職員の方々に、ひとかたならぬお世話になりました。心よりお礼申し上げます。

二〇〇八年二月二九日

川 那 部 保 明